

2016年の年頭に当たって：

## 「埼玉大学 All in One Campus at 首都圏埼玉～多様性と融合の具現化」 第1章

新年 明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願ひ致します。

2016年。国立大学が法人化されて12年が経ち、新たな中期目標・中期計画期間が始まります。第3期に掲げる埼玉大学のビジョンは「埼玉大学 All in One Campus at 首都圏埼玉～多様性と融合の具現化」。2016年はその第1章です。大学としての基盤強化と埼玉大学の個性化を軸として、より一層存在感を増すよう、機能強化を進めなくてはなりません。厳しい現状は十分に認識しつつも、明るい希望を抱いて、自他共に誇れる明日の埼玉大学に繋げるべく、みなさんとともに新しい年のスタートを切りたく思います。

### 国立大学を取り巻く状況

平成28年度政府予算案が昨年12月24日に閣議決定されました。財政制度等審議会での議論で大いに心配させられましたが、幸いなことに、平成28年度の国立大学法人運営費交付金は前年と同額とされました。ただし、運営費交付金の中、「3つの重点支援の枠組み」ごとの重点配分、いわゆる機能強化分については、概算要求段階から約100億円減の308億円となっています。しかも、その中の101億円は「機能強化促進係数」による財源を活用するとのことで、「機能強化促進係数」は埼玉大学を含む枠組1の大学に対して0.8～1.2%、枠組2（特定分野）が1.0～1.4%、枠組3（世界）が1.6%とされています。運営費交付金の総額が減額されなかったことについては一安心であるものの、機能強化に対する重点支援の財源は運営費交付金ということですので、喜んでばかりはられないというのが実状です。

また、平成29年度以降の運営費交付金についても全く予断を許しません。実際、財務省は「文教・科学技術予算のポイント」を示しており、国立大学に対し、第3期中期目標期間中の自己収入目標の設定（寄附金受入額：2014年度比で、2018年度までに1.2倍、2020年度までに1.3倍。民間からの共同研究資金受入額：2013年度比で、2018年度までに1.3倍、2020年度までに1.5倍等）を求めるとともに、意欲的な取組を支援していくことに言及しています。

### 埼玉大学の状況

埼玉大学ではこれまで、学部の枠を超えた再編と連携による大学改革を進めてきました。これは、大学の主たるミッションが知の創造であり知の継承であることをしっ

かりと据え、埼玉大学の基盤としての研究と人材育成の二つを充実させるものです。まず、研究力強化については戦略的研究部門と URA オフィスによる、研究の国際展開を可能とする体制を整え、その結果、研究は着実に進み、大型の外部研究費を獲得するなど、一定の成果を挙げています。一方、人材育成機能の強化についても計画は順調に進み、昨年 4 月には人社系大学院を一本化して人文社会科学研究科に拡充し、6 人の外国人教員を採用する等、国際化に対応できるリーダー的人社系人材の育成基盤の整備が進んでいます。

昨年を振り返ると、こうした大学の基盤強化を着実に進めた 1 年だったと言えますが、今年 4 月から始まる第 3 期中期目標・中期計画期間では、基盤強化だけでなく、埼玉大学のブランド化、個性化につながる、さらなる機能強化を進めなくてはなりません。文系・理系・教員養成系の全学部が一キャンパスに集まっている利点、しかもそのキャンパスが、都会の喧噪とは無縁であるものの、とてもアクセスの良い首都圏埼玉にあって、多様な学生が集うという利点を活かして、「埼玉大学 All in One Campus at 首都圏埼玉」のフレーズの下、学問や学生の多様性を尊重しつつシナジーをもたらす「多様性と融合の具現化」を目標に改革を進めます。新たな具体的取組としては、文理融合型産学官金・共創スペース「先端産業国際ラボ」の設置、および地域のニーズに則した人材育成のための「統合キャリアセンターSU」の設置等、地域活性化拠点としての機能をより一層強化します。

### ノーベル賞受賞が教えてくれたもの

昨年、埼玉大学は卒業生である梶田隆章さんのノーベル物理学賞受賞に大いに沸きました。役員も、教員も、職員も、学生も、そして同窓生も、全員がその快挙を大変嬉しく思うとともに、埼玉大学を誇りに思えました。自分の職場への誇りや愛着、一体感、愛校心と言ってもいいのかも知れませんが、それが埼玉大学をより一層輝かせてくれるように思えてなりません。

この度の、梶田隆章さんのノーベル賞受賞という出来事は、大学構成員が目標を同じくし、一丸となって協働すること、質の高い仕事、質の高い教育、質の高い研究に誇りを持って取り組むことの重要性を教えてくれたと思います。

### 申年の年頭に当たって

2016 年は申年です。京都大学霊長類研究所の松沢哲郎教授が、40 年にわたるチンパンジー研究を通して得た「人間らしさ」についての知見を興味深く話されています（「想像するちから -チンパンジーが教えてくれた人間の心-」、學士會会報、第 913 号、2015 年）。人間に最も近い進化の隣人であるチンパンジーを深く知ると、人間らしさの進化的起源が見えてくるとのことです。

そこでは、人間らしさとして「心」、「言葉」、「絆」の三つをあげています。

まず「心」。チンパンジーは親を真似て学習するのに対し、人間の教育の特徴は教えること、手を添えること、子供に頷き、微笑み、褒め、見守り、認めることとし、人間の教育の本質は「認める」にあるとしています。

次に「言葉」。人間なら「AならばB」と教えられれば、勝手に「BならばA」と推論します。この推論は、AとBが等価な場合以外は論理的には間違っています。その意味で人間のほうがチンパンジーより雑ですが、人間はこの推論のおかげで言葉を使えるようになったのかもしれないとのこと。

最後に「絆」。子育てにおいて、チンパンジーは群れの中でお母さんは自明ですが、男性は皆群れに残るので血縁関係があって、「チンパンジーはお母さんと複数のお父さんズに育てられる」と言え、これに対し、「人間はお父さんズ、お母さんズという複数の大人が共同で育てている」と言えるとのこと。

そして、松沢教授は「人間とチンパンジーとの違いの一番は「人間は想像するちからを持つ」ということ」とし、「人間らしさとして挙げた「心」も「言葉」も「絆」も、この「想像するちから」に由来しています。」とした上で、次のように結論しています。「チンパンジーは「今この世界」を生きているので、絶望しないし、明日のことで悩まないのです。一方、人間は「今この世界」だけではなく遠く離れた過去や未来に思いを馳せたり、地球の裏側の人に思いを寄せたりします。そんな「想像するちから」を持つからこそ、簡単に絶望します。でも、どんな難しい状況にあっても、未来を「創造するちから」を持つから、明日を信じて希望を持つことができます。それが人間なのだと分かりました。」と。

最後に、冒頭の私の言葉に「人間らしく」という言葉を挿入して再掲します。

2016年。厳しい現状は十分に認識しつつも、「人間らしく」明るい希望を抱いて、自他共に誇れる明日の埼玉大学に繋げるべく、みなさんとともに新しい年のスタートを切りたく思います。みなさん、今年もよろしくお願い致します。

学 長      山口 宏 樹